

双生児にみられた過剰歯の2症例

○國松明日香、小笠原榮希、石田万喜子、
尾崎正雄、本川 渉
福岡歯科大学小児歯科学講座

小児歯科臨床において、過剰歯などの歯数の異常に遭遇する機会は比較的多く、それらは遺伝的傾向を示すといわれている。なかでも過剰歯は、上顎の正中部に発現するものがその大多数を占める。

今回我々は、男子双生児の上顎に各々2歯、および女子双生児の上顎に各々1歯の過剰歯を認めた症例を経験したので報告する。

症例1 患児：初診時7歳6か月の男子双生児
初診日：2000年1月17日

家族歴：父親にやや切端咬合の傾向がある他は、特記すべき事項は認められなかった。

既往歴：兄弟共に喘息の傾向が認められた。

主訴：上顎前歯部の萌出状態の精査希望

初診時の口腔内およびエックス線写真所見：兄弟共に Hellman の歯牙年齢はⅢAで、ほぼ全ての乳歯がC₂～C₄の齲蝕に罹患していた。兄の上顎右側中切歯は半萌出で、左側中切歯相当部に、1歯、弟は上顎左右中切歯相当部に2歯の過剰歯が萌出していた。さらにデンタルエックス線写真にて、兄の上顎右側中切歯根尖相当部に逆性の埋伏過剰歯が認められた。

処置：兄弟共に萌出していた過剰歯は抜歯、兄の埋伏過剰歯は現在経過観察中である。

症例2 患児：初診時5歳3か月の女子双生児
初診日：1993年6月22日

家族歴および既往歴：特記すべき事項は認められなかった。

主訴：齲蝕治療希望

初診時の口腔内及びエックス線写真所見：姉妹共に Hellman の歯牙年齢はⅡAで、多数歯がC₁～C₂の齲蝕に罹患していた。デンタルエックス線写真にて、姉は上顎左側乳中切歯の、妹は上顎右側乳中切歯の根尖相当部に順性埋伏過剰歯が認められた。

処置：両親の希望により、姉の過剰歯の萌出を待つて姉妹同時期に抜歯を行った。

上下顎の左右小白歯部に5本の埋伏過剰歯が認められた一症例

○京極絵美、久保山博子、加治木政彦、
姫野良祐*、本川 渉
福岡歯科大学小児歯科学講座、ひめの矯正歯科

【緒言】

小児歯科臨床において埋伏過剰歯を経験することは少なくない。これに関する報告は国内外を問わず多数報告されており、そのほとんどが上顎前歯部に発現し、小白歯部にみられる頻度は少ないとされている。今回演者らは、下顎両側小白歯部に2本ずつ存在した埋伏過剰歯を摘出し、数年経過した後に、上顎右側小白歯部に新たに過剰歯が発生した症例を経験したので、その概要について報告する。

【症例】

患児：9歳6か月 女児

初診日：1995年8月23日

家族歴および既往歴：特記すべき事項なし

主訴：上顎前歯の前突感

初診時の口腔内所見：来院時の萌出歯は

6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6
6	E		3	2	1		1	2	3	D	E	6

の計23歯。

前歯部の被蓋関係は、over bite 1mm、over jet 8mmで、白歯部の咬合関係は Angle Ⅱ級であった。

パノラマエックス線所見：下顎両側小白歯部の歯冠部付近に小白歯様歯冠形態を呈する埋伏過剰歯が2本ずつ認められた。

処置および経過：下顎にリンガルアーチを装着後、口腔外科にて埋伏過剰歯の摘出を施行した。その後、下顎小白歯部の自然萌出を観察しながら over bite、over jet の改善、下顎骨の成長促進、大白歯の咬合の確立を目的に矯正治療を行い、現在保定中である。埋伏過剰歯を摘出して3年6か月後に撮影したパノラマエックス線写真において、新たに上顎右側第二小白歯歯根尖部に小白歯様硬組織が確認された。埋伏過剰歯については、将来抜歯予定である。

【参考文献】

- (1) 大須賀直人、今野喜美子、林 子、近藤靖子、宮沢裕夫：兄妹に認められた下顎第二小白歯部の埋伏過剰歯について、小児歯科学雑誌、36(1)：138-143、1998、